

横浜市小学校社会科研究会
5学年部会

研修会記録

第 4 号

令和6年 9月 4日

横浜市小学校教育研究会
会長 沼田 留美子
横浜市小学校社会科研究会
会長 高畠 聰
同 学年部長 田澤 哲哉

【提案日時】

9月 4日 (水)

【会 場】

横浜市立 平沼小学校

【西富岡小 会場】

提案 金井 伸一 先生 (西富岡小)

司会 大橋亜矢子 先生 (元街小)

記録 田中 沙季 先生 (都田西小)

【駒岡小 会場】

提案 能登 清仁 先生 (駒岡小)

司会 藤原 佳澄 先生 (新鶴見小)

記録 武藤 幸一 先生 (さちが丘小)

【提案 金井 伸一 先生 (西富岡小)】

1 単元名

「公害との奮戦記

～あたりまえの空気さえ奪われた四日市の人々からのメッセージ～」

2 提案者より

子どもたちの実態は元気で明るい。資料をもってきて考えることは少しずつできてきている。総合のテーマが「環境」であり、公害の単元にも関心がある状態で授業に取り組むことができる予定である。

教科書では水俣病に注目しているが、今回は「四日市ぜんそく」を材として扱う。その理由として①裁判で決着がついていること②国土理解に適していること③子どもたちも追究しやすいことの3点である。

そして、本単元を通して子どもたちには企業側の気持ちも考えてほしいと思っている。単元を進めていくなかで、どうしても被害者に寄り添った考えになってしまいがちであるが、最初は住民も喜んでいたことや希望を持っていたことを知り、その中で企業が行ってきた意味を考えてほしいとも考えている。

検討内容として

- ① 「今の部分で何をしているか」が指導要領の中では大切。今を見るには過去をしっかり見る必要があるのではないか。→ただし偏らないようにしたい
- ② 子ども達が資料を集めたり、考えたりする時間を取りたい。→先生主体というよりは、子ども自身に。ただ時数も限られている。

3 協議会

・様々な資料を提示していく中で、新聞記事がある。その中の「やっぱり」という企業側の

言葉が見出しになっているため、そこから企業の考え方や気持ち、思いを考えることができるのではないか。企業がなければ、今の私たちの生活はないという葛藤を子ども達に考えさせてもおもしろいかもしない。

- ・年表や写真を見て、子ども達は驚くし、印象に残りやすい（白黒写真でもわかる黒い煙が立ち上っている様子）。前半はこの流れがよいのではないか。
- ・つながる人は当時塩浜小学校6年生だったYさん。Yさんをとおして当時の暮らしと現在の暮らしを比べてみていく。ただし、様々な立場（企業・原告・従業員・子ども・住民）で見ていく単元にしたいため、Yさんだけということはしたくない。そのために、企業や原告の資料を集め必要がある。
- ・本時に向けて、企業側の種まきはどうするか。→過去の学習をしていく中で、「企業側が何をしていたのか」が出てほしい。国の政策が行う前の生計は糸と漁であり、そこに戦後の貧しさも加わっている。そんな中、誘致され、工場ができたことで生活がうるおい、恩恵があったことには間違いないが、その資料（数字的な）はない。校歌から読み取れるかもしれない。

【提案 能登 清仁 先生（駒岡小）】

1 単元名

「森林とともに生きる～未来へつなげ森林資源わたしたちにできること～」

2 提案者より

林業は50年～60年と時間がかかるので、他の材とは時間の流れが違う。そのことを児童にどのように伝えたらいいのか？環境に興味がある子が多いので この単元はあってはいると考える。木を切ることはよくないことと考えている児童も多い。

小田原の森林組合の方を取り上げて「森を守るために誰がどのように関わっているのだろう」という問い合わせを追跡していきたい。最初に子どもたちに生活の中の木を考えさせたい。どのようにすれば山が多いことをつかめることができるのであるのか。また、この流れで流れていくか知りたい。

3 協議会

単元を見通す学習問題と学習計画の吟味

○50年、60年の時間の流れを実感できるのか？問題意識を子どもが持てるのか？

○資料を見て、子供からこの学習問題が出てくるか？

○駒岡小の周りに森林は？

→森林は隣にあるけどあまり行っていない（虫を捕まえていけない）三池公園はある（歩いて30分ぐらい）

○森林のイメージがそろえてあげられる導入ができるとよい。（山に行っている子を調査）

○4年生の学習で水源林として学んでいることを使う。→人工林について確認する

【人の出会い方】

○出会わせようとしている人（森林組合の会長さん）

○森の美しさ（人工林）に驚き。→誰が手入れしているのだろうとならないか。

単元の流れと本気の学習問題の吟味

○会長の思いは？→国産材の木を使って欲しい（会長の思い）

【木まつりについて】

→川上、川中、川下が協力して一緒にイベントをやっている。

→私たちにできることはなんだろう？と具体的な話しにしたい。

○森林組合の人にいつ、どのように出会わせるか？

○出会いからどのように本気の学習問題に繋げるのか？

○組合員は何人？どの範囲までやっている？→実際に切っている人は7名

○子どもは実態を掴みにくい単元なのでどう見せていくか？

○山主が間伐するべき→でもできない→そこで森林組合員が入ってくる。

○木と人間の共生を目指している。

○きまつりが唐突？木まつりが大事なのか？

○川上、川中、川下繋がりや林業に携わっている人のつながりがこの単元の肝。

○国土の保全の視点も大事。→木を使うことが森を守っていることになる→なぜ？

＜講師の先生より＞

若色 昌孝先生

社会科の先生は今の世の中で気になることをもつことが大切。そして、気になったら調べることをしていくと、毎日が教材研究になる。いつかその知識が役立つかもしれない。

自然災害、森林、校外の単元配列と時数について。単独の3つの単元として扱うのか、1つの大単元として扱うかで力を入れるところがかわる。限られた時数で、何を教え、何を考えさせるのかを明確にして臨むことが好ましい。本時の学習問題は、単元展開中に変わるものであると思って進める。前時で生まれるくらいの気持ちでいて、指導案とは違う問題になることもある。

【金井先生】

教材研究が十分にされており、先生の熱が伝わる。その教師の思いをどのように授業に生かすかが大切である。検討の中でもあったが、多角（人々の立場）、多面（歴史、経済、時代、環境）などの視点で考えていくことも大切である。

子どもたちは大気汚染をどのように考えているかを把握する必要がある。「空気をきれいにする」のメカニズムを子どもはどう理解しているのか。台風が一度来て、汚染された空気が飛ばされたら、まちの空気はきれいになるのかなど。正しいメカニズムを大人は知っておくべきである。

「裁判の継続」の意味を子どもに伝える必要がある。裁判の学習が6学年であるため、まだ十分な理解がない。「継続しない」＝「納得」ということになるのかも伝えていきたい。

十分配慮されていると思うが、喘息児童が思い悩まないように慎重に単元を進めてほしい。

【能登先生】

小田原の教材性は十分にあるが、まだまだ小田原もわかっていないことが多い。この単元では何をねらいとしているのかをもう一度考えていきたい。

日本の国土の67%が森林であり、世界から見ると日本は高い方である。この「日本の森林面積67%」ということを教師自身がどうとらえるのか、国土にとって何が問題なのか、そこから子どもたちは何を読みとるのかを教師が考えておくことが大切である。「日本は高い方なのに、なぜこんなにも保全をするのか」「世界はなぜこんなに少ないのか」など。

「森林の育成や保護に従事している人々」で、国や県の関わりをどうしていくかで、指導要領の内容に近づけることができる。

子どもの意識を、どうやって小田原組合、小田原市に近づけるか、検討していってほしい。

文責 田中 沙季 先生（都田西小）、武藤 幸一 先生（さちが丘小）